

## パネル展示「動物介在教育のプログラム開発とその実践」

—特に短期・長期飼育プログラムの利点と問題点について—

帝京科学大学 理工学部 アニマルサイエンス学科 動物介在システム研究室  
 (横井恵・田邊かえで・山崎郁・田村麗・村木佑実・広瀬千絵美・花園美樹・溝端真也  
 小檜山祐介・花園誠)

### 1 短期飼育プログラム

#### (1)材料と方法

- ①対象 市内市立A小学校の2年次学童4クラス114名。  
 ②経緯 小学校より生活科の一環として「動物の観察」を主目的とした教室内飼育を試みたいとの依頼を受けた。学年主任およびクラス担任と数回協議、導入の時期と期間、実施の形態、責任の分担等を決定した。  
 ③実施期間 2005年6月16日～6月30日の土日を2回挟む2週間。  
 ④貸与動物 各クラスを8班ずつに小班編成(計32班)、班内で飼育したい動物をディスカッションさせた。なお、クラス担任には貸与可能な動物種をあらかじめ告知、動物種の選定にあたっては多少の誘導をしていた。なお、貸与動物の匹数はその種類に関わらず各班1匹とした。選定された動物種とその匹数は以下の通り。ウサギ1匹・ハムスター12匹・スナネズミ8匹・ハツカネズミ6匹・モルモット5匹。また、飼育に必要なケージ類は全て貸与した。  
 ⑤飼育指導 動物種ごとに分散してもらい、自作の紙芝居で、「動物のいのちについて」・「掃除や持ち方について」・「与える餌について」等を解説した。掃除や持ち方等の動物に対する直接的行為については実演を交え実技指導した。念のため、学童には「動物にしてはいけないこと」を描いた冊子を補助資料として与えた。そして、教諭には各動物について飼育方法や生態、習性について詳しく書かれた資料を渡した。緊急の場合は携帯電話でのやりとりで対応することとした。  
 ⑥観察指導 教諭より、学童自身の力で動物の行動や生態について気付いてほしいとのねらいを伺い、学童の気付きを促すため、観察の視点を与えた冊子を作成し1人に1冊与えた。

#### (2)結果と考察

- ①飼育の実態 全ての班が、毎朝に掃除と餌・水やり等の世話を行っていた。放課後にも餌と水の残量の確認をしていた。土曜日はクラス担任と有志の学童が、日曜日は大学生が、各動物の世話を請け負った。  
 ②利点 短期間と限定したためか、動物飼育に対する集中が持続、濃密な飼育体験が出来た。  
 ③問題点 短期間であったためか、時に動物に対する関わり方が過剰になり、動物に多少のストレスを与えたようである。動物福祉的にはやや工夫が必要と思われる。  
 ④教諭の感想 「本校は動物の長期飼育が難しい状況

にあり、短期間とはいえとてもいい経験となった。」当初の目標を達成、好評だった。

### 2 長期飼育プログラム

#### (1)材料と方法

- ①対象 市内山間部の市立B小学校の3年次学童1クラス9名。  
 ②経緯 過去に数回訪問活動をした経緯があり、今回は持続して教室内飼育すること大学側から勧めた。ウサギを飼育することとし、クラス担任と学童を交え、全員が納得するまで数回話し合った。土日は大学にウサギを返却、平日のみ飼育するという事で最終的に合意した。  
 ③実施期間 2004年11月～2005年3月の冬休みを挟む約4ヶ月間。  
 ④貸与動物 ウサギ1匹。飼育に必要なケージ類は全て貸与した。  
 ⑤飼育指導 導入に当たり、2校時分の時間を戴き、実技も交え飼育指導した。また、観察項目をリストにした飼育日誌を与え、世話の自覚を促した。  
 (2)結果と考察  
 ①飼育の実態 1日2人の当番制で、朝と放課後の1日2回、ウサギの世話をした。冬休みは学童がウサギを自宅に持ち帰り、1日～2日、持ち回りで世話した。  
 ②利点 長期に渡り、繰り返しウサギに関わられたので、全員が上手にウサギを扱えるようになった。  
 ③問題点 移動を含め土日ごとに飼育環境が変わることがストレスになっていたようで、動物福祉的には工夫が必要と思われた。  
 ④教諭の感想 小学校3年生に扱わせるにはウサギはやや大きいようで、特に冬休みに持ち帰ったのは傍目に負担だった。それにも関わらず、学童の喜ぶ顔が印象的だった。

